

1 研究テーマ

個別移行支援計画を基にした就労支援の実践

2 研究テーマ設定の理由

前回までの研究では、学校教育から社会へ移る時期の支援（移行支援）のために、高等部在学中から卒業後3年間（計6年間）のなだらかな移行支援を行うためのシステムの構築を行った。また、本校では、平成14年度から個別移行支援計画を作成してきたが、前回の研究で、個別の教育支援計画の中の一つとして、「個別移行支援計画」の策定・実施を試み、在校生用と卒業後支援用の二つの様式を整えることができた。この個別移行支援計画は、学校生活から卒業後まで一貫した的確な教育的支援を行うこと、アフターケアを見据えた支援を行うこと、関係諸機関との連携等を更に深めることや家庭への支援の充実につなげること等、重要な役割を果たすと考えた。

そこで、昨年度からの2か年の研究では、実際の就労支援の指導上において、移行支援システムの在り方と「個別移行支援計画」の活用法について検証していく必要があると考えた。

3 研究目的

個別移行支援計画を基に、就労支援のシステムを検討し、個別移行支援計画の有効な活用方法を検証する。

4 研究方法

- (1) 卒業後への移行支援システムの検証
- (2) 個別移行支援計画の活用と見直し
- (3) 事例研究を通しての個別移行支援計画の検討（2事例）

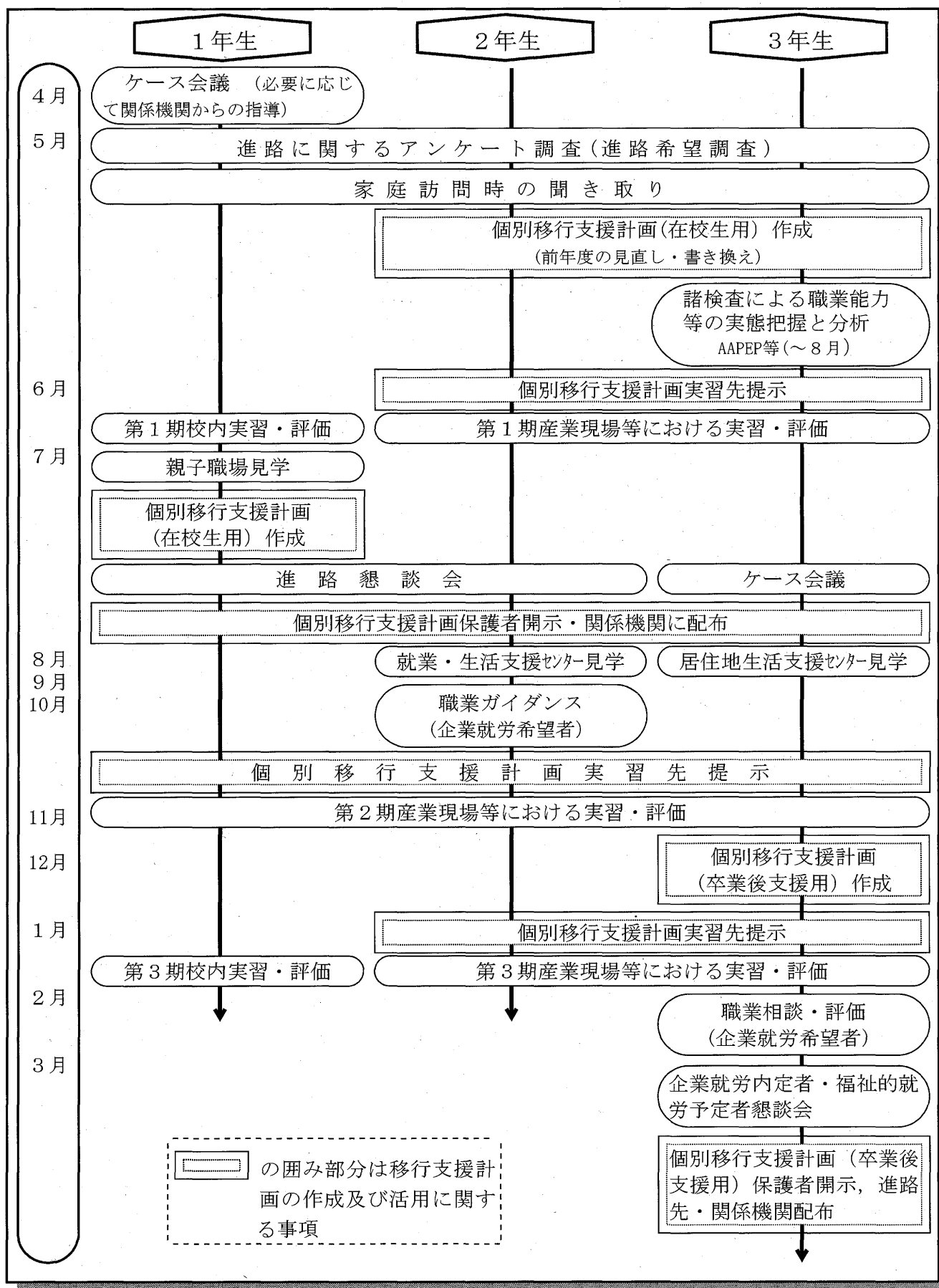
5 研究の実践

(1) 1年次の研究経過

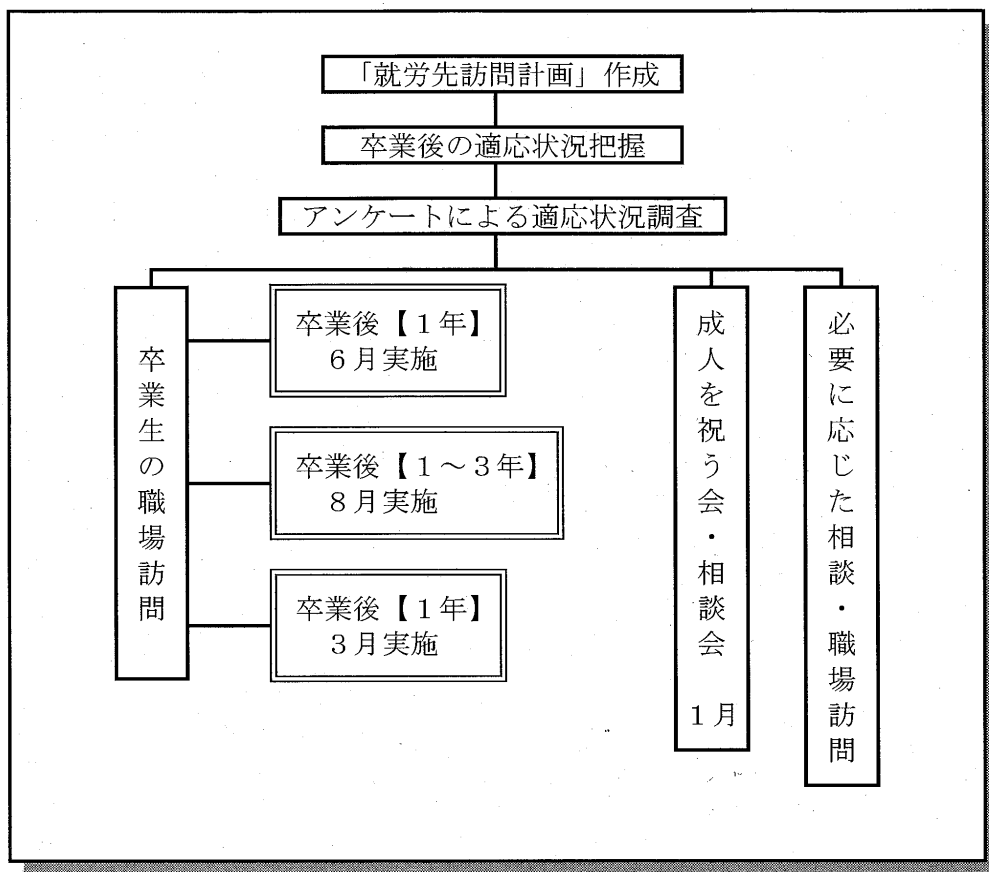
17年度は事例を通して、卒業後への移行支援システムの検証や個別移行支援計画の活用と見直しを行い、移行支援の在り方を検討してきた。

成果として

- ・卒業後への移行支援システム（71ページ図Ⅳ－1，72ページ図Ⅳ－2）に沿って教育的実践を行ってきたが、個々のニーズに即した進路指導を行うことができ、関係機関との連携も機能したので、2年次にも継続する。
- ・卒業後への移行支援システム（在学時）において、AAPEP，WAIS-R等のアセスメントを実施し、生徒の職業能力等の実態把握と分析を進めた。そのことにより、障害の特性や課題、有効な手だてを得ることができ、就労に向けての具体的な課題や日々の授業における目標が明確になった。また、個別の教育支援計画や個別移行支援計画にアセスメントを反映させることでニーズに即した授業展開が図れるようになってきた。
- ・個別移行支援計画（在校生用）が、障害理解の点から関係諸機関へ情報の引継ぎとして重要な役割を果たすことができた。



図Ⅳ－１ 卒業後への移行支援システム (在学時)



図Ⅳ－２ 卒業後への移行支援システム(卒業後)

- ・個別移行支援計画(卒業後支援用)を用いて、関係諸機関に情報を伝えるなど、在学時から関係諸機関と連携しながら支援をしていくことによって、社会生活へのスムーズな移行ができるようになってきた。

課題として

- ・個別移行支援計画(在校生用)は作成や記入がしやすいものか、有効に活用できるものか更なる検証をすること。
- ・アセスメントを教育的支援の方法や手だての工夫につながるものとして、高等部全生徒を対象にAAPEPの実施をすること。
- ・「産業現場等における実習評価表」(73ページ資料Ⅳ－１)や「就労前確認評価表」(74ページ資料Ⅳ－２)を検討し、更なる活用を図ること。

宇都宮大学教育学部附属養護学校

産業現場等における実習評価表

事業所名 _____
 実習生氏名 _____
 具体的な仕事内容 _____
 出勤状況 _____

記入年月日 平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日
 記入者名 _____

出勤日数 () 日
 欠勤日数 () 日 理由 ()
 早退日数 () 日 理由 ()
 遅刻日数 () 日 理由 ()

評価の基準

A 良くできた
 B だいたいできた
 C 課題は多いがまあまあできた
 D あまりできなかった
 E できなかった

次の項目について、該当するA, B, C, D, Eのいずれかに○印をつけてください。

	項 目	評 価				
一 般 的 能 力	1 身支度がきちんとできたか	A	B	C	D	E
	2 あいさつ・返事がしっかりできたか	A	B	C	D	E
	3 思いや考えをはっきり伝えられたか	A	B	C	D	E
	4 周囲の人に協力的であったか	A	B	C	D	E
	5 決まりや約束が守れたか	A	B	C	D	E
	6 落ち着いて過ごすことができたか	A	B	C	D	E
作 業 の 技 能 ・ 態 度	7 仕事に必要な体力はあったか	A	B	C	D	E
	8 指先の器用さはあったか	A	B	C	D	E
	9 手腕の動きはよかったか	A	B	C	D	E
	10 身体の機敏さはあったか	A	B	C	D	E
	11 能率(速さ)はよかったか	A	B	C	D	E
	12 正確性はあったか	A	B	C	D	E
	13 意欲的に取り組めたか	A	B	C	D	E
	14 集中力はあったか	A	B	C	D	E
	15 持続力はあったか	A	B	C	D	E
	16 仕事への取りかかりはよかったか	A	B	C	D	E
	17 準備・後片付けはできたか	A	B	C	D	E
	18 自他の安全に気をつけられたか	A	B	C	D	E
	19 手順をよく理解できたか	A	B	C	D	E
	20 指示や注意を素直に聞き入れたか	A	B	C	D	E
	21 報告・応答がしっかりできたか	A	B	C	D	E
身 辺 処 理 能 力	22 衣服の着脱が一人でできたか	A	B	C	D	E
	23 食事を一人で食べることができたか	A	B	C	D	E
	24 排せつが一人でできたか	A	B	C	D	E
	25 清潔な身なりや手洗い・鼻かみ等ができたか	A	B	C	D	E
	26 健康管理(体調の変化の訴え)ができたか	A	B	C	D	E
	27 自他の持ち物を混同せず整理整頓ができたか	A	B	C	D	E

総 合 評 価	A	B	C	D	E
---------	---	---	---	---	---

◎ 実習生についてお気づきの点がありましたらご記入ください。

1. 今回の実習で良い点と思われるところ
2. 今後努力してほしいと思われるところ
3. その他

生徒の就労前確認評価表（プロトタイプ）			1難しい・未定着 2サポートがあればある程度可能 3定着・習得済み				
氏名		年 月	日現在				
	確認項目	1	2	3	評価点	コメント	
1	集中力	興味・関心	現在の作業への興味・関心				
		熱心さ	熱心に作業に取り組む				
		責任感	自分の仕事に責任をもつ(分担された仕事内容がある程度やりぬく)				
		正確さ	正確に作業する				
		丁寧さ	製品、道具等を丁寧に扱う				
		習熟	作業に慣れるに従って習熟する				
		清掃	清掃、後始末をする				
		危険への配慮	危険(利用者、物、個所)に配慮し、対応する				
2	体力	継続勤務	遅刻・欠勤・早退をしない				
		清潔への意識	清潔な身なり、手洗い・消毒等				
		健康管理	自分で健康管理ができる(生活リズム)				
		安定性	終日コンスタントに作業に取り組む				
3	協力（コミュニケーション）	連絡	遅刻・欠勤・早退の場合の連絡				
		働くことの理解	給料・社会義務のことなど				
		報告	作業終了後、異常時等に報告する				
		質問・要求援助	指示がわからない時には質問する				
		私語・よそ見	私語・よそ見をしない				
		作業理解	指示通り作業をする				
		創意工夫	見通しをもち、作業することができる				
		あいさつ・返事	従業員、利用者、訪問者等に日常のあいさつや返事をはっきり言う				
		素直さ	指示や注意に素直に従う				
		言葉遣い	適切な言葉遣いをする				
		感謝・謝罪	援助を受けたり、失敗したりした時に感謝・謝罪する				
		他者との協力	周囲の人と協力して、作業、行動ができる				
4	その他	交通機関の利用	通勤手段が獲得されている				
		動機づけ	モチベーションの手段がある(賞賛)				

(2) 2年次の研究について

昨年度から、移行支援システムを整備し個別移行支援計画を作成して各進路先との引継ぎを行ってきた。その成果として、福祉的就労については「このような個別移行支援計画があると支援しやすい。」「卒業後3年間は、学校の支援が受けられるといった支援方針や支援方法はうれしい限りである。」という評価を受け、おおむね順調に移行できた。

しかし、一般就労においては、卒業後、書式だけでは生徒の実態が適切に伝わらず、就労先で問題となる部分が出て、スムーズに適應できない事例もみられた。そのような部分も踏まえて、今年度は、従来の移行支援システムを基に、さらに個々の実情に対応できるような運用を考えていきたい。

1) 卒業後への移行支援

在学時の移行支援のシステムは、図IV-1 卒業後への移行支援システム（在学時）に示すとおりである。1年次の成果でも挙げたように、このシステムに沿って教育実践を行ってきたが、ほぼ問題なく進路指導を行うことができた。

昨年度からの修正点として、12月に実施していた居住地生活支援センター見学（3年生）と2月に実施していた就業・生活支援センター見学（2年生）を進路懇談会・ケース会議直後の8月に実施することとした。関係機関の担当者と顔見知りになり、その後すぐに居住地生活支援センター見学と就業・生活支援センター見学を行うことで、生徒自身が支援機関を身近に感じることができるとともに、卒業後に相談できる場所としての意識をもつことをねらいとした。

また、3年生においては、ある程度進路希望先がはっきりしてきた第2期の「産業現場等における実習」（以下「現場実習」）から「就労前確認評価表」も併用し、実習先での適應状況の評価を行い、就労に向けての課題を探ることとした。

卒業後の移行支援システムについては、おおむね機能し、ほぼ確立できたものと考えた。

2) 個別移行支援計画の活用について

今年度は個別移行支援計画の活用に関して、以下に挙げることを重点的に行った。

① 学校生活での活用

1年次の成果と課題から、生徒の職業能力等の実態把握と分析を明確化し、個々の学校生活での目標を立てるための手だてとなるAAPEPの検査の対象を広げ実施した。そこでのアセスメント結果や、現場実習で課題になった内容を個別の教育支援計画（様式2）に目標化をして学校生活で実践し、個別移行支援計画（在校生用）に反映させることとした。

② 現場実習における活用

現場実習の際、個別移行支援計画（在校生用）を実習先にも開示してきた。生徒が新しい実習先に行く時は面接の際に個別移行支援計画を持参し、説明を行い目標や支援方法について共通理解を図ってきた。本人の状況や支援の手だてを伝えることで、実習先での支援者が本人とかわかりやすくなっていると感じた。

また、現場実習で本人の理解をしてもらうための簡単なツ

サポートカード

宇都宮大学教育学部附属高松中学校〇年 氏名 ○○○○○○

自分の特技、特性

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

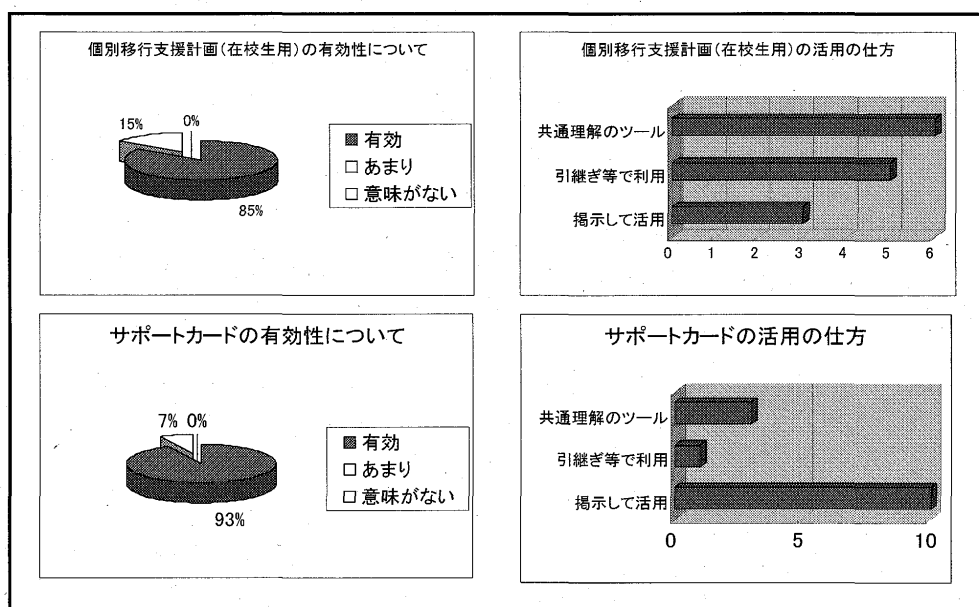
特技・特性を表す写真を貼ります

課題など

実践の目標

図IV-3 サポートカード

ールとして、一部の生徒に「サポートカード」（前ページ図Ⅳ－３）を作成し活用を図ってきたが、今年度から全生徒分を作成し、実習先に配付した。個別移行支援計画に比べ、サポートカードは、本人の特性や興味・関心、課題や目標に絞って簡単に記入することとし、支援者にとって、わかりやすく簡便で、個別移行支援計画を補完するものとなった。今年度第１期現場実習時に個別移行支援計画やサポートカードの内容について各実習先にアンケートをお願いした（回収率78％）結果、図Ⅳ－４に示すとおり、おおむね好評であった。



図Ⅳ－４ 個別移行支援計画とサポートカードのアンケート結果

③ 関係諸機関との連携における活用

関係諸機関（障害者職業センター、就業・生活支援センター、ハローワーク、福祉事務所等）との継続的な連携の充実を図るため、移行支援システムにあるとおり、１・２年生は進路懇談会、３年生はケース会議等、保護者・生徒・関係諸機関の担当者とともに話し合う機会においても個別移行支援計画を活用した。その会議の場において、個別移行支援計画(在校生用)をそれぞれの参加者に開示することにより、生徒の実態が伝わりスムーズに情報交換ができるとともに、現場実習の状況等を知らせることで、適切なアドバイスを得ることができた。

さらに個別移行支援計画(卒業後支援用)は３年生がある程度、卒業後の進路先の目安がつく12月頃から作成し、年度内に各進路先及び卒業後の関係機関に配付し、卒業後の移行支援の文書化したものとして活用してきた。また昨年度は、前述のサポートカードも個別移行支援計画（卒業後支援用）と一緒に配付した。

３）事例による移行支援の在り方の検討

卒業後への移行支援システムに沿った取り組みから、老人施設への就労を目指している在校生の事例と、スーパーに就労後、卒業後支援を行ってきた卒業生の事例の２事例について以下に記載する。

6 事例研究

(1) O. M (高等部3年・女) への支援

本人・保護者とも老人施設への就労意志が固まっていたことを受け、高等部2年時に訪問介護員(ホームヘルパー)2級の資格を取得し、2年時以降の現場実習を、すべて老人福祉施設に絞って行い、実習先とは個別移行支援計画を基に連携を図った。学校での授業と現場実習を密にリンクさせ、本人の進路希望実現を目指した事例である。

1) 実態及び特性

O. Mは、数的処理(金銭や数量)や言語(漢字等の読み書き)が苦手であるが、基本的な生活習慣が身に付いていて、就労するための土台はできている。しかし、現場実習中に、仕事による疲労が表情に出てしまうなど、仕事に必要な体力面・精神面での弱さが指摘されていた。また、対人関係においても、年齢や性別、性格によってコミュニケーションに得手不得手がみられる。

しかし、仕事に対して前向きに取り組もうとする意欲があり、できないことを克服しようという気持ちは強い。そのため、時間をかけて丁寧に指導し、賞賛等で自信をもたせることにより、徐々にできることが増えてきている。

2) 支援の方針

昨年度までは、WAIS-RやAAPEPなどのアセスメントを実施して、客観的に生徒の実態を把握し、それらの情報を基に、個別の教育支援計画や個別移行支援計画に目標化して授業や日常生活に活かしてきた。さらに、現場実習で得られた評価も、本人の課題を把握・分析し、個別の教育支援計画に盛り込んで、実習先の業務に即した学習内容で授業を展開してきた。その結果、徐々に自信をもちながら、現場実習に取り組めるようになってきた。

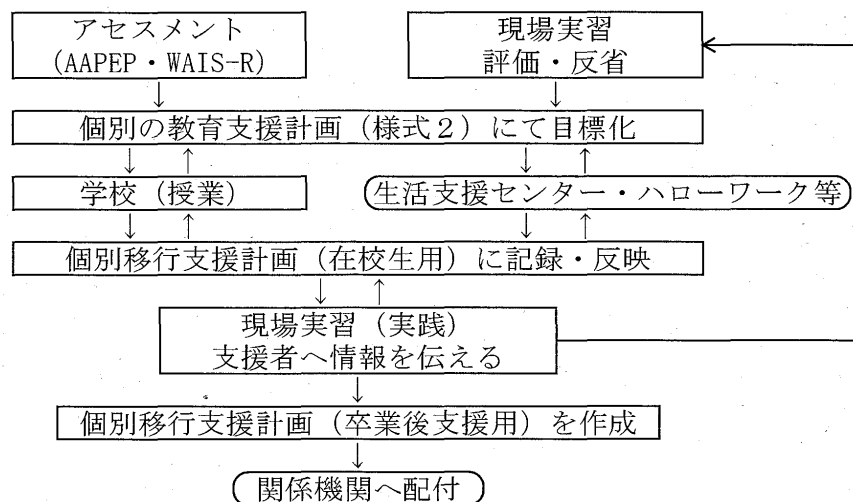
そこで本年度は、昨年度の支援を継続し、さらに卒業後を見据えた支援を考え、以下のような方針を立てた。

- ①アセスメントや評価を基に授業を実践し、現場実習や個別移行支援計画に反映させる。
- ②個別移行支援計画を基に関係諸機関との連携を図る。

①については、アセスメントで得られた本人の特性や老人ホームでの実習で得られた評価・反省を、個別の教育支援計画(様式2)で目標化し、目標達成に向け授業を実施する。そして、授業によって得られたスキルを個別移行支援計画(在校生用)に記載する。現場実習中は、それを基に、授業で身に付けたスキルを活かせるよう支援する。直接担当する支援者には、その都度、本人にとって理解しやすい具体的な支援方法の情報を提供する。

②では、現場実習前の面接やケース会議等で、実習先や居住地および就労地域のハローワークや生活支援センター等と個別移行支援計画を基に共通理解を図る。個別移行支援計画は、継続的に支援するための情報伝達のツールとして活用する。

O. Mの支援の方針については、次ページ図IV-5のような流れで決定していく。



図Ⅳ－5 O.Mへの支援の流れ

3) 支援及び状況

昨年度のアセスメントの結果や、実習で得られた評価・反省を基に、今後の就労に必要な知識や技能を習得するため、個別の教育支援計画（様式2）の各領域・各学習場面において、具体的な目標を設定した。目標化したものは、資料Ⅳ－3の太線で囲んだ部分である。そして、目標に応じた授業実践を行い、得られたスキルを実習先で活かし、充実した実習が展開できるようにした。

資料Ⅳ－3 O.Mの個別の教育支援計画（様式2）（抜粋）

	短期目標（第二学期）	支援の方法・手立て	学習場面	評価
発達学習支援	☆一定のペースで10分間走り続けることができる。 ・相手の話を聞いたり質問したりしながら話の内容を深めることや、自分の思いや考えを伝えながら、スピーチをすることができる。	・伴走や言葉かけでペース調節を行う。 ・話すことに慣れるまでは、話す内容について題材を指定する（できるだけ、自由に話ができるような雰囲気を作る）。 ・カードを用いながら繰り返す。10までの数に慣れさせる。 ・実物のお金で実践を繰り返す。	朝の運動 チャレンジ	
生活支援	・日課表として、一日の流れをクラス全体に伝えることができる。 ・時間ごとに合うように給食前のワゴンを選び、ご飯を配膳した後に残った場合は、友達に聞きながら分けることができる。 ◎洋服の簡単なほつれを直すことや、ボタン付け、アイロンかけなどを行うことができる。 ◎音楽や手芸を通して、友達と楽しく活動することができる。	・職員室で日課を聞きながらメモを取らせて、わからないことは質問するように練習させる。 ・授業の後、すぐに係の活動に取り組めるように言葉かけを行う。 ・配膳の時、友達に聞きながら分けるようにする。 ・毎日少しずつ取り組み、練習をする。 ・自分で興味のあるものや、家庭でもできそうなものに取り組ませる。	クラスの時間 日常生活学習 生活学習 余暇の時間	
就労支援	・洗濯業務の流れや、機械の操作を覚え、わからないことがあった時は、質問しながら取り組むことができる。 ・作業工程を理解し、見通しをもって時間内に作業を終えることができる。	・一度聞いたことを忘れないようにメモをし、確実に一人で仕事ができるように、本人の意識を高めるような言葉かけを行う。 ・時計やタイマーを使い、作業にかかる時間を意識させながら取り組むようにする。	進路 作業学習（コンクリート班）	

☆：自立活動の目標 ◎：家庭生活と連携している目標

以下に、授業での実践と授業で身に付けたスキルを活かした実習先での実践、及び、関係諸機関との連携について記載する。

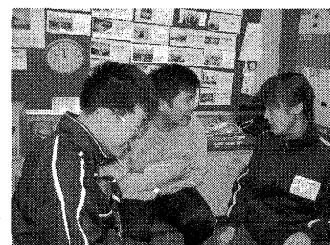
① 授業での実践

(i) 発達・学習支援での取り組み

老人ホームでの実習後、73ページ資料Ⅳ－1の一般的能力「3 思いや考えをはっきり伝えられたか」の評価が低いことを数回にわたり、指摘された。

このことを踏まえ、個別の教育支援計画（様式2）の発達・学習支援の領域にある「チャレンジ」で、自分の気持ちを伝える「スピーチ」の授業を設定した。

初めの頃は、自分の気持ちを伝えるというより、昨日の出来事等を話すことで精一杯であった。しかし、教師が「映画のどんなところが面白かったの？」などの助言を入れていくに従って、徐々に自分の気持ちや思いを話すことができるようになった。また、友達にも「買い物に行って、かわいい鞆と帽子を買ってもらって、うれしかった。ところで日曜日何してたの。」というように、具体的に自分で考えたことを答えたり、質問したりすることもできるようになってきた(写真Ⅳ－1)。

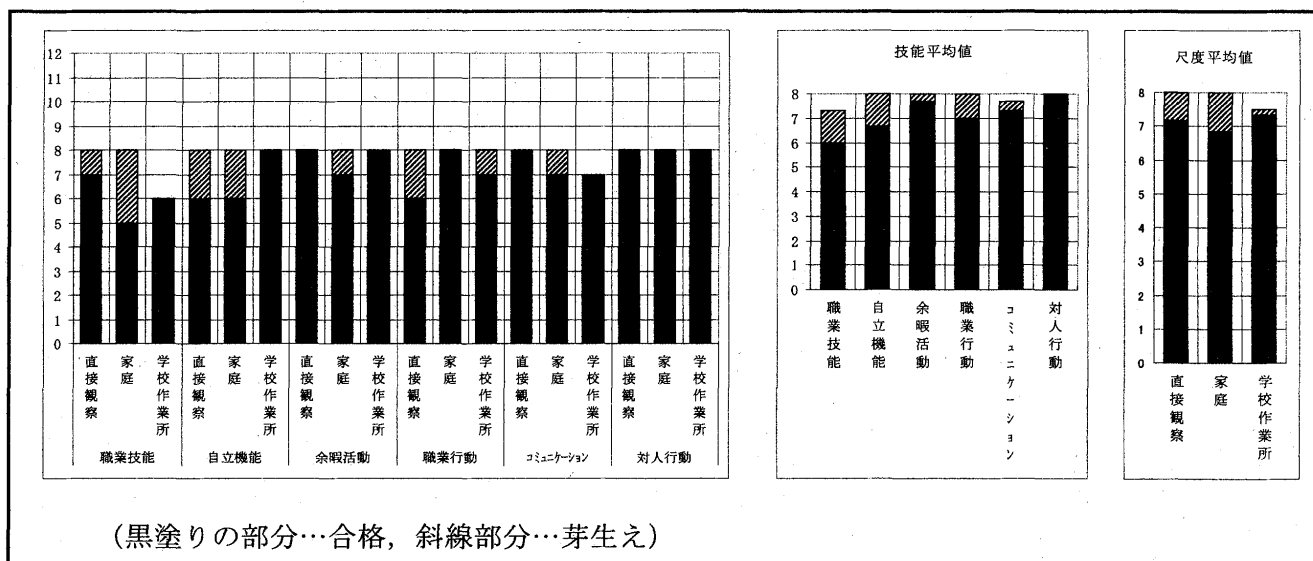


写真Ⅳ－1 スピーチの練習

チャレンジでのこのような取り組みもあり、3年生の第2期の現場実習では、利用者との会話のやり取りが以前に比べて多くなり、自分の気持ちや考え、相手の立場を考えた質問をすることができるようになってきたという評価を得ることができた。

(ii) 生活支援での取り組み

2年時に行ったAAPEP（図Ⅳ－6）において、職業技能・自立機能とも「芽生え（現時点では完全に一人ではできないが、これからの経験次第ではできるようになるであろう）」という結果が出ていた。また、実習時の評価では、経験不足からくる掃除機等の道具の取り扱いのぎこちなさや、不器用さが指摘されていた。



図Ⅳ－6 O. MのAAPEPの結果

既に実習を2回行い就労の可能性も見えてきたため、第2期現場実習にあたっては、実習先の職員と教師で、事前に個別移行支援計画を基に本人理解や作業内容の選定のための話し合いをもち、実習中に必要とされる技能に関する学習内容をあらかじめ授業に取り入れる（在学中からトップダウンで授業に取り込む）ことにした。

そこで、第2期の現場実習では洗濯業務（簡単なフロアの清掃も含む）を行うということが決まっていたので、それに必要な技能を習得するために「生活学習」で、洗濯物をたたむことや（写真Ⅳ-2）、パジャマ等のボタン付けの学習をした（写真Ⅳ-3）。

「日常生活学習」では、給食の配膳のワゴン運びを一人で行った（写真Ⅳ-4）。休み時間を利用して、掃除機かけを行った（写真Ⅳ-5）。

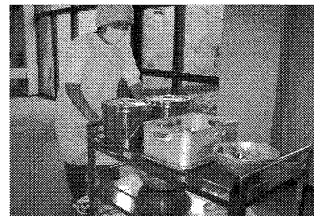
現場実習では、学校と同じようにワゴンを運んだが、とても慎重になりすぎてしまい、時間がかかりすぎるなど、手際の良さや仕事の機敏さという点に欠けるということを指摘されたが、本人の意欲もあり、繰り返し行うことでできるようになるだろうとの評価を得た。



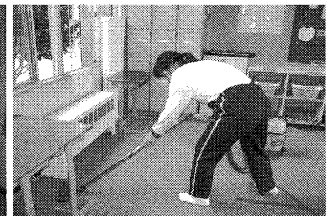
写真Ⅳ-2 洗濯物たたみ



写真Ⅳ-3 ボタン付け



写真Ⅳ-4 ワゴン運び

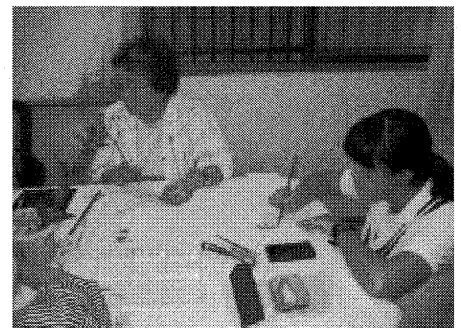


写真Ⅳ-5 掃除機かけ

(iii) 就労支援での取り組み

AAPEPでは、コミュニケーションにおいて問題がないということであったが、実際に実習を行ってみると、支援者に質問する必要があるのに自分から言えなかったり、利用者（高齢者）とのコミュニケーションの取り方がわからなかったりして、結果として実習での評価が低かった。

そのため、現場実習以外にも「進路」の授業で地域の老人施設に出向き、利用者と一緒に活動する経験を積ませた（写真Ⅳ-6）。そこでは、利用者と絵を描いたり、利用者の入浴後の髪を乾かしたり、積極的に自分から利用者とかかわらなければならない場面が多く、そのためには支援者に質問しなければ何をして良いのかわからないところも多くあった。最初、質問を遠慮している場面では、聞きに行くようにという教師の言葉かけを必要としていたが、回を重ねるに連れて自分から進んで聞きに行けるようになった。



写真Ⅳ-6 地域の老人施設にて

このように、年齢、性別の違う相手への接し方の経験を多く積むことで、現場実習では、以前よりも積極的に職員や利用者に質問したり、言葉をかけたりすることができるようになってきた。

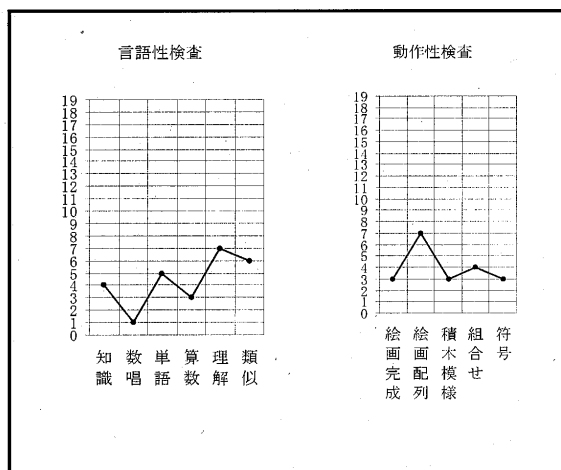
② 実習先での実践

2年時に行ったWAIS-Rの結果（次ページ図Ⅳ-7）では、絵画配列の値が高く出ている。こ

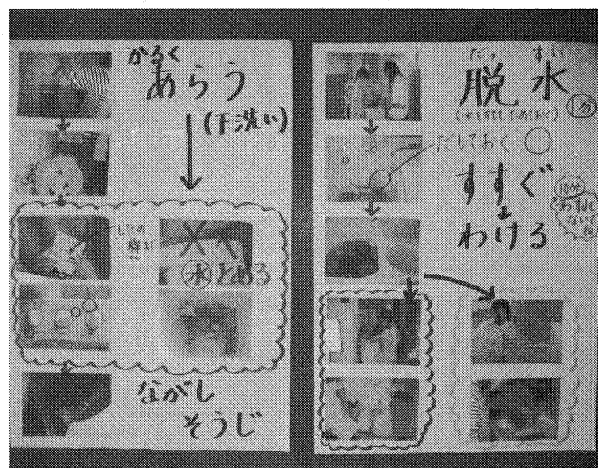
それは、物事の時間の流れに沿った予測が得意ということである。

それを受けて、第2期の現場実習で何度も指示を受けながら取り組んでいた二槽式洗濯機の使い方の手順について、時間に沿って取り組む内容を書き(写真Ⅳ-7)、本人の目につくところに掲示して欲しいことを支援者に伝えた。

その結果、それまで多かった水の止め忘れが減り、支援者からの言葉かけが少なくても、本人が安心して仕事に取り組むことができるようになったと報告を受けた。そして、支援の必要がなくなった時点で、この手順カードを取り外すことにした。



図Ⅳ-7 O. MのWAIS-Rの結果



写真Ⅳ-7 手順カード

また、日頃から漢字について苦手意識があり、日記等で書く漢字も少ない。授業においては、継続的に漢字の読み・書きの練習を行ってきたが、難しい漢字になると、覚えてもすぐに忘れることが多かった。特に、第2期の現場実習での洗濯業務では、洗濯物に書かれた人の姓名が読めることが求められていた。しかし、人名は特別な読み方の漢字も多く、実習期間中に覚えることは難しいと思われた。

そのため、現場実習前にあらかじめ利用者の名前を確認しておき、その名前をカードに書いて、名前に対して抵抗がないように、何度も読みの練習をした。そして現場実習では、居室ごとに色分けしたカードに利用者の名前を書き、そのカードと洗濯物に記名してある文字とのマッチングによって、洗濯物を分類する方法を、実習担当の支援者に伝え、実践した(写真Ⅳ-8)。この情報を伝えるにあたっては、個別移行支援計画(在校生用)(次ページ資料Ⅳ-4)に記載し、提示した。

その結果、支援者から、漢字に抵抗があっても、読めない漢字はマッチングをすれば効率よく洗濯物を分類できたという報告を受け、支援方法の有効性が伺えた。



写真Ⅳ-8 名札カード

資料Ⅳ－４ Ｏ・Ｍの個別移行支援計画(在校生用)

個別移行支援計画(在校生用)					
氏 名	Ｏ・Ｍ	学年	高等部 3年	記入者	○ ○ ○ ○
実態・特性	<ul style="list-style-type: none"> ・素直で優しく、思いやりがある。やや涙もろい面がある。 ・善悪の判断をきちんとすることができる。 ・構音障害がみられるものの、生活の場面に問題はない。 ・自分の行動に自信がもてない場面では、教師に確認を取りながら進めることができる。 ・洗濯、食器洗いが得意であるが、掃除（特に掃き掃除、掃除機）は苦手である。 ・言葉による指示を３つぐらいは覚えて動くことができるが、手順を示すカードがあったり、メモをとらせたりすることで、確実に取り組むことができる。 ・漢字は苦手であるが、文字としてマッチングでき、徐々に覚えることができる。 ・ブルースやピアノ、お茶を習い、積極的に余暇を楽しむことができる。 				
進路相談の概要					
校内における 進路相談	<ul style="list-style-type: none"> ・人を相手に働く場合は、柔軟な考え方を身に付けさせたい。 ・働く体力をつけていった方がよい。（２年・家庭訪問） ・卒業後は一般就労へ。幼稚園や老人ホーム等での実習もやらせたい。（２年・７月） 				
関係機関との 進路相談	<p>〈生活支援コーディネーター ○○〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外出の際に生活支援のサービスを受けるなど、生活の広がりをもたせる上でも今後、利用を考えていきたいと思います（家庭だけの範囲ではなく）。 ・たくさんの経験をさせて、就労への選択肢を増やしていきたいと思います。（１年・７月） ・ヘルパー２級で対人の職務に就ける。３か月１８０時間。（２年・７月） <p>〈○○ハローワーク ○○〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雇用不足で障害者雇用理解のありそうな所を開拓する。（２年・７月） <p>〈職業センター ○○〉（３年・７月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・決まった人ばかりではなく、初めて会った人にもあいさつしたり、話ができるとよい。 <p>〈○○障害者支援センター ○○〉（３年・７月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・老人施設では時間でやる事が決まっているので、支援者が１対１で付くことが難しい仕事。早く慣れていって、誰にでも話ができるように。 <p>〈職業生活支援コーディネーター ○○〉（３年・７月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジョブコーチ制度も利用して欲しい。掃除洗濯以外の仕事でも、できる仕事を見つけられればいいのだが。本人の「やりたい」という気持ちが大切。 				
本人の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・企業への就職を考えている。中学時代のマイチャレンジで○○を企業体験している。幼児（高２年時、○○幼稚園実習経験あり）やお年寄りと触れ合ってみたい。 ・老人施設で働きたい。（３年・７月） 				
保護者の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・企業への就職。ヘルパー２級を取得し、いろいろ経験させた上で決めたい。（H17・取得済み） ・本人の希望を尊重したい。（３年・７月） 				
卒業後に向けて、本人・保護者の希望をもとに考えられる支援計画					
長期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな老人ホームや福祉施設を体験することで、具体的に自分の進路について定めることができる。 				
短期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を描いたり本を読んだりするなど、趣味を活かして豊かに過ごすことができる。 ・掃除（特に掃除機）や食事の手伝いを通して、自分の役割を自覚し自立した生活を送ることができる。（３年・４月） ・生活に密着した課題（お金「計算機の利用、必要なお金が出せる」や時間の概念など）に慣れる。できれば解決する力を身に付ける。（３年・４月） ・日常の生活や就労に関する漢字を読めるようにする。（３年・９月） ・自分から質問をしたり、自分の気持ちを話したりすることができる。（３年・９月） 				
今後の方針	<ul style="list-style-type: none"> ・企業就労へ向けて、体力面や精神面で頑張れる範囲を増やしていく（忍耐力）。 ・長い時間が必要な仕事で、途中で言葉かけがなくても、集中を持続できるようにする（長い時間であると、適当になったり、時間がかかったりする）。 				

この個別移行支援計画等を各支援機関に提出することに同意します。

平成18年10月23日

本人署名 ○ ○ ○ ○

保護者氏名 ○ ○ ○ ○

印

③ 居住地域での連携

3年時の夏休みに、本人と保護者、ハローワーク、就業・生活支援センター、障害者職業センター、障害者支援センターの各職員と、本校の教師でケース会議を行った。個別移行支援計画（在校生用）を基に本人への理解を促し、就労への意志を確認した。また、ハローワークの職員に実習先へ訪問してもらうなど、卒業後へ向けて、地域への移行支援のバックアップを行った。

さらに、12月になり、卒業へ向けた準備として、個別移行支援計画（卒業後支援用）の作成（資料Ⅳ－5）を開始し、卒業後への必要な情報を記載した。

資料Ⅳ－5 O. Mの個別移行支援計画(卒業後支援用)

個別移行支援計画(卒業後支援用)			
1 プロフィール			
氏 名	O. M	性 別	女
生 年 月 日	昭和〇〇年〇月〇〇日		
卒 業 年	平成19年3月	住 所	〇〇〇〇〇〇〇〇
連 絡 先	〇〇〇〇-〇〇-〇〇〇〇		
進 路 先	特別養護老人ホーム 〇〇〇〇	出 身 校	宇都宮大学教育学部附属養護学校
実 態 ・ 特 性	<ul style="list-style-type: none"> ・素直で優しく、思いやりがある。涙もろいところがある。 ・何事にも意欲的で、一生懸命取り組むことができる。 ・構音障害が見られるが、日常生活に問題はない。 ・洗濯や食器洗いが得意である。 ・時刻はデジタル時計の方が、理解しやすい。 ・漢字は日常使っている慣れているものであれば読める。 		
学校生活での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・長時間の仕事にも耐えられるような体力をつけること。 ・言葉かけがなくても、同じ仕事に30分以上集中して取り組むこと。 ・注意されても泣かないこと。 		
		療育 (B1)	
		手帳	身障 (級)
			なし
2 今後必要な就労支援・生活支援			
就 労 支 援	これまでの状況	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業後は人と接する仕事に就きたいという希望や本人の実態等から、高等部2年からの現場実習は、すべて老人ホームで行ってきた。年齢・性別によってコミュニケーションを取ることが難しい場面も見られたため、老人ホームの中でも仕事のはっきりしている洗濯業務を中心に実習に取り組んだ。 	
	今後の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は短時間でもしっかり仕事を覚え、徐々に就業時間を伸ばすことができればと考えている。 ・仕事をやりながら、集中できる時間を伸ばしたり、効率の良い仕事の流れを、組み立てられるようにさせたい。 	
	支援機関(担当者)	〇〇市障害福祉課(〇〇) ハローワーク〇〇(〇〇) 〇〇障害者職業センター(〇〇)	
生 活 支 援	これまでの状況	<ul style="list-style-type: none"> ・手伝いをしながら、簡単な食事を作れるように練習している。 ・平日家に一人での時間は祖母と過ごし、週末は母親との外出を楽しんでいる。同級生やその保護者と週末遊びに行くこともある。 ・水泳や茶道など、余暇を積極的に楽しんでいる。 	
	今後の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・このまま余暇を充実させたい。 ・同年代の友達や仲間作りもさせたい。 	
	支援機関(担当者)	〇〇市生活支援センター(〇〇) 障害者就業・生活支援センター(〇〇)	
3 卒業後の学校からの支援			
今後のかわり	・卒業後3年間を目安に定期的に巡回を行う。		
具体的な支援内容	・同窓会や運動会などの機会に、本人の様子や保護者の話を聞く。		
支援機関(担当者)	・定期的に保護者や本人、進路先への聞き取りを行う。		
	・卒業後支援・同窓会係(〇〇〇〇〇)		
備 考			
<p>関係機関との連携に御理解、御協力いただけますか。</p> <p>(はい むずかしい)</p> <p>この個別移行支援計画を各支援機関に提出することに同意します。</p> <p>平成19年 3月 日</p> <p>本人署名 _____</p> <p>保護者氏名 _____ 印</p>			

3) 考察と今後の課題

昨年度までは、アセスメントによって本人の客観的な情報を得たり、現場実習先の評価から本人の実習先での様子を把握したりすることで、個別の教育支援計画（様式2）に具体的な目標を立て、就労へ向けての課題解決を目指した学習を行ってきた。

さらに、今年度は一歩踏み出し、授業で習得したスキルや、授業で使用した本人がもっとも理解しやすい有効な手だてを、個別移行支援計画に記載し、実習先（特に直接の支援者）に伝えることで、本人のできることが増え、実習で得るものが今まで以上に多くなった。「アセスメント・評価→授業→実習→評価→授業…」という一連の支援の流れ(78ページ図Ⅳ－5 参照)が大切であり、その中で、重要なツールとなるものが、個別の教育支援計画であり、個別移行支援計画であった。支援の必要な場面すべてにおいて、個別移行支援計画を提示し、伝え、活用していくことで、本人の3年間の支援を継続的に行うことができた。また、高等部3年になり、就労の職種が決まってくると、そこで求められているスキルを、在学中からサポートすることができた。以上のような支援もあり、第2期の現場実習後には内定の報告を受けることができた。

これからは卒業後支援として、①就労先や地域での本人の理解者・支援者を増やすこと、②卒業後に仕事を定着させるためのバックアップ体制を作ること、③仕事や人間関係でつまづいた時のフォローのシステムを準備することについて取り組んでいきたい。

(2) H. T (19歳・男) への支援

個別移行支援計画を基に、実習先での本人の実態や特性（アスペルガー障害）の理解を得ながら、大学や関係機関と連携し、本人の進路希望が実現し、その後の課題にも継続して支援した事例である。

1) 就労支援の状況（在学時の経過）

アスペルガー障害であり、療育手帳はB2。在学中は、いくつかの現場実習を重ねる中で、「スーパーで働きたい。」という本人の強い希望があった。2年生の後半からスーパーでの実習を一本にスタートさせてきた。仕事内容は、主にバックヤード（青果部門）が中心となった。しかし、実習中の仕事をすすめる中で、品出しの際の接客や作業中の会話（独り言や暴言、一方的に話しを続けること等）といった課題がでてきた。

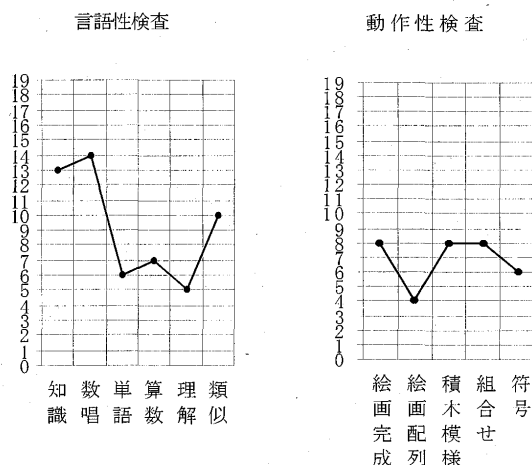
その課題から、改めて卒業に向けての支援の方針を検討した結果、アスペルガー障害という発達障害のH. Tの就労支援にあたるには、特性や実態を再チェックする必要に迫られた。そこで、次の支援の方針を立て、卒業までの学校における指導と現場実習の支援を行ってきた。

① アセスメントを基にした授業の実践

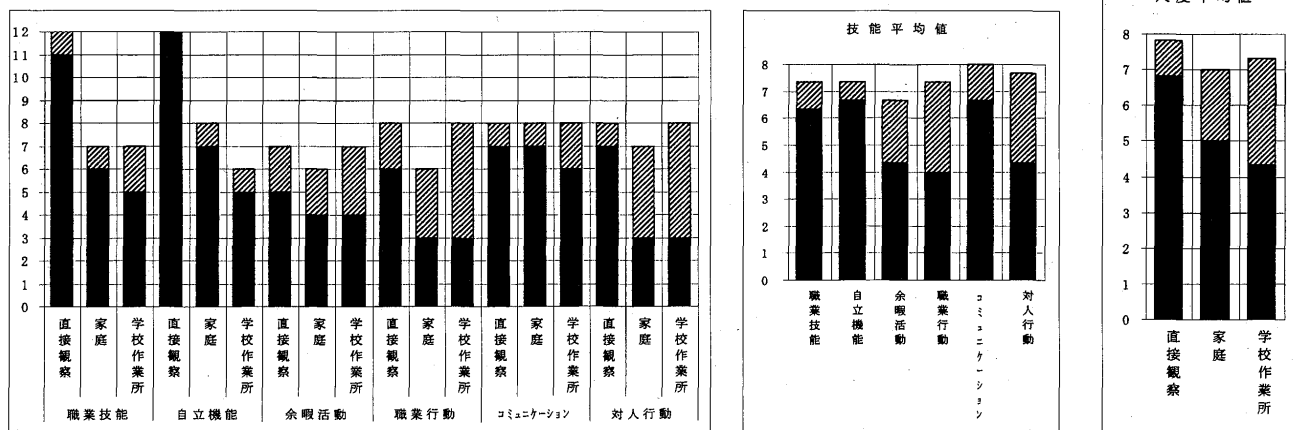
アセスメントは、WAIS-R, AAPEPを実施した。アセスメントの実施にあたっては、宇都宮大学大学院の協力を得た。

WAIS-Rの結果（図IV-8）の言語性検査では、短期記憶の高さを示す「数唱」が高く、一般的な事実についての知識量を示す「知識」も高いという特性が現れた。単語の意味・理解を問う「単語」や実用的知識や過去の経験、常識的な行動の知識などの「理解」、ストーリーの展開を考える「絵画配列」等に弱さがみられた。

AAPEPの結果（図IV-9）では、尺度平均値から、「家庭」・「学校」の値が低く改善の余地があることと、技能平均値は、「余暇活動」・「職



図IV-8 H. TのWAIS-Rの結果



図IV-9 H. TのAAPEPの結果

業行動」・「対人関係」等が低い、伸びることも予想され、学校での支援の目安にした。

その一つが、作業班の変更である。AAPEPの解釈から、「職業行動」のスピードや正確さが今後伸びるであろうと予想し、「木工班」から「織物・縫製班」に変更した。その結果、ミシンのスピードに合わせる手元に対する集中力が高まり、仕上げた数を確認するための枚数確認カードを手がかりに、自分から積極的に取り組んでいた。また、「余暇活動」を見るとパソコンが得意であるということを活かし、「チャレンジ」の時間においてパソコンにデータ入力をすることやエクセルの基本的操作・表・グラフ作成等の学習をした。「朝の運動」で走った周回数をエクセルで管理し、記録することでモチベーションが高まり、1か月程で2周も周回数の記録を伸ばすことができた。

② 専門機関との連携

大学教員も同行した巡回指導にて、支援のポイントが示された。

- 実習先でのキーパーソンをつくること
- 仕事の順番や量が分かるようにすること
- サポートカード等を利用すること

キーパーソンには、H. Tの主任にあたる青果部門のチーフが身近な理解者に当たると捉え、特性などの情報を伝えた。仕事の順番や量を分かりやすく示すことでやることがわからずに立っている状態を減らすことや、約束カード(図IV-10)を活用することで行動の改善が図れた。サポートカードの利用については、パソコン操作を得意とするH. T自身が作成した(図IV-11)。本人を知ってもらうこととサポートしてもらいたいこと等の内容が書かれており、実習先に掲示した。本人にかかわる従業員には、H. Tを理解してもらうためにサポートカードの利用は効果的であった。第3期の現場実習が終了する頃には、4月からの採用が内定した。

③ 個別移行支援計画(卒業後支援用)の策定(進路先との連携)

個別移行支援計画(卒業後支援用)の策定では、進路先からの要望、生活支援(余暇支援を含む)のアドバイス等を反映させ、個別懇談で本人・保護者の承諾を得た後に関係機関と検討し、支援内容を明確にした。卒業時には、本人・保護者の同意を受け、個別移行支援計画(卒業後支援用)を進路先に配付し引継ぎを行った。

引継ぎ時に進路先と連携を図れたことで、実習中からの継続した支援として、キーパーソンは青果部門のチーフであること、約束カードやサポートカードは、バックヤードに掲示して本人を知ってもらうこと、障害に対する理解をしてもらうことにつながっている。また、アセスメントとして、卒業生に実施している「就労前確認

約束
・ 仕事中新聞紙などを見ない
・ 包丁の刃先を下に向ける
・ 仕事中は私語をしない
休憩時間はOK

図IV-10 約束カード

サポートカード	写真
宇都宮大学教育学部附属養護学校3年 氏名 H・T	
とくぎ とくせい 自分の特技、特性 ・パソコンが得意(ワード、エクセル) ・サッカー、相撲観戦 ・漢字が得意(漢字検定3級)	
かだい 課題など ・言葉づかいをていねいに	
こんなサポートがあれば 食品の産地などの話をしたい	
いしゅう もくひょう 実習の目標 ・実習時間内を集中して働くことができる ・決まり事や約束事を守って働くことができる	

図IV-11 本人作成のサポートカード

評価表」を、青果部門のチーフと教師が一緒に評価し、仕事に対する適応の状況を把握した（資料Ⅳ－6 参照）。

2) 卒業後の移行支援の状況

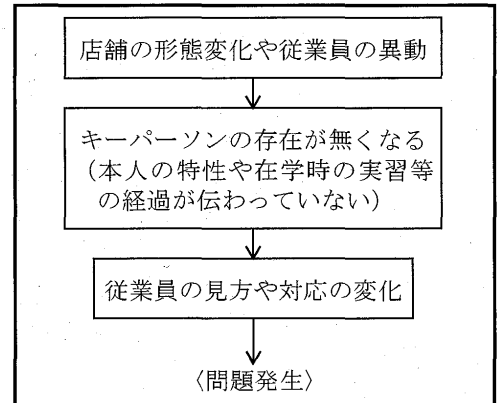
卒業後への移行支援システム（卒業後）により、就労1年目は年に3回（6月・8月・3月を予定）の訪問を計画的に実施することになっている。4月に入社を終え、スーパーに就職したH. Tは遅刻・欠勤せずに生き生きと働き始めている。

その間に、スーパーのリニューアルオープンのため数週間を他店にて働くことになった。そのスーパー（青果部門）には、養護学校の生徒を実習を通して担当したことのある従業員がいたため、障害者に対する理解があり、スムーズに働くことができていた。しかし、就労2か月目リニューアルオープン後のスーパーに戻ったところ問題が発生した。様々な要因が引き起こした問題であった（図Ⅳ－12）。

その問題とは「仕事が思うようにできないと暴言が出る。」というものであった。周囲の従業員のH. Tに対する見方に変化があり、「感情の変化から危険を感じる。」「仕事に集中しない。」「勝手に店内に出てしまう。」等のコメントが出ていた。ミーティングの場で、新しい店長や青果部門のチーフの協力を得て、就労前確認評価表を再チェックした。その結果（資料Ⅳ－6）、集中力の「熱心さ」や「責任感」では、時折新聞紙を読んで作業が止まり、手元への集中が途切れて間違えることもあり評価が下がった。体力の「安定性」、協力（コミュニケーション）の「創意工夫」「他者との協力」等、前回と比べ伸びがみられないという評価を受けた。

また、「本人を知るために、個別移行支援計画やサポートカードだけではわかりにくい。」ということや「現在の状況では、店内に出せない。他店舗への異動も考えている。」という話があった。

このようなことから、卒業後の移行支援の方針を基に、卒業後支援係が以下のような支援を行った。



図Ⅳ－12 問題発生の要因

資料Ⅳ－6 H. Tの就労前確認評価表

生徒の就労前確認評価表（プロトタイプ）			1 難しい・未定着 2 サポートがあればある程度可能 3 定着・習得済み			
氏名	H. T	確認項目	1	2	3 評価点	コメント
1 集中力	H. T	興味・関心	現在作業への興味・関心		3	やりたい仕事だけに、興味・関心は強い。
		熱心さ	熱心に作業に取り組む		2	作業の箱に入っている新聞紙を隠してしまうと作業が止まる。
		責任感	自分の仕事に責任をもつ（分組された仕事内容がある程度やりぬく）		2	手元への集中が途切れると、間違えることも。
		正確さ	正確に作業する		2	「責任感」に同じ。
		丁寧さ	機械、道具等を丁寧に扱う		2	包丁を扱うことに慣れていた。
		習熟	作業に慣れるに従って習熟する		1	作業に慣れることで、逆に習熟しているように見えない。
		清掃	作業、後始末をする		1	苦手なのか、片付け方が適当である。
		危険への配慮	危険（利用者、物、箇所）に配慮し、対応する		2	配慮が足りない場面がみられる。
2 体力	H. T	継続勤務	遅刻・欠勤・早退をしない		3	なし
		清潔への意識	清潔な身なり、手洗い・消毒等		3	なし
		健康管理	自分で健康管理ができる（生活リズム）		3	なし
		安定性	毎日コンスタントに作業に取り組む		1	日により、むらがある。
		連絡	遅刻・欠勤・早退の場合の連絡		3	なし
		働くことの理解	給料・社会保険など		3	なし
		報告	作業終了後、異常時等に報告する		3	なし
		質問・要求援助	指示がわからない時には質問する		3	なし
3 協力（コミュニケーション）	H. T	私語・よそ見	私語・よそ見をしない		1	一度話し始めると、止まらない。
		作業理解	指示通り作業をする		2	時折、忘れることがある。
		創意工夫	見通しをもち、作業することが出来る		1	日々、集中が途切れているため、指示を出さないと次の仕事ができない。
		あいさつ・返事	従業員、利用者、訪問者等に日常のあいさつや返事ははっきり言う		3	なし
		素直さ	指示や注意に素直に従う		2	人を見ることがある。
		言葉遣い	適切な言葉遣いをする		2	人によって、むらがある。
		感謝・謝罪	援助を受けたり、失敗したりした時に感謝・謝罪する		3	「ありがとう」等の言葉が書える。
		他者との協力	周囲の人と協力して、作業、行動ができる		1	マイペース
4 その他	H. T	利用者との会話	利用者と簡単な会話ができる		1	未経験である。（店内に出ることは許可していない）
		交通機関の利用	通勤手段が獲得されている		3	なし
その他	H. T	動機づけ	モチベーションの手段がある（賞賛）		1	給料がもらえることや褒められることでやる気は出る。
					2	
			2006. 1	2006. 6		

- ① アスペルガー障害（本人）の理解
- ② 個別移行支援計画（卒業後支援用）による卒業後の関係機関との連携
- ③ 居住地及び就労先地域の生活支援センターとの連携

①のアスペルガー障害（本人）の理解について、本人の問題点や課題に対する対応の仕方を就労先と整理し、今までの学校の対応事例や具体的な支援・手だてについて記載したサポートブック（本人にあったマニュアル的なもの）を作成した（資料Ⅳ－７）。スーパーと保護者間の情報交換をするために、連絡帳をつけることを開始した。それにより、スーパーでの仕事の様子や連絡事項と家庭でのH. Tの様子が伝わりやすくなった。約束カードには、「バックヤ

資料Ⅳ－７ H. Tのサポートブック

No. 1

H. Tさんの対応について

1. 過去のケースについて（学校生活時・現場実習時）

① 強い語調について

- ・見通しがきかない場面
- ・時間などのこだわり
- ・緊張を強いられる場面

対応の仕方

- ◎ 基本的に、言葉遣いはその場で注意してきた。また、その上でその状況から判断し、心を受け止めながら応えていく配慮もしてきた。

② 時間のこだわりについて

- ・特に、帰宅時間にこだわり、慌てることがあった。
- ・一日の流れの中で、作業時間の延長で、不安定になることはなかった。

対応の仕方

- ◎ スケジュールの変更、追加を前もって伝える。
- ◎ 紙に書いて示すなどの工夫をし、約束する。

No. 2

③ 作業の集中力について

- ・落ち着かなく、他に注意がいくってしまうことがあった。実習中もつい新聞紙を見入ってしまうこと、持ち場を離れてしまうことがあった。
- ・学校の作業学習などでは、作業のスピードや集中に課題がみられた。

対応の仕方

- ◎ 本人に約束カードをもたせ、常に意識させた。また、それをもとに繰り返し確認させた。
- ◎ 本人が見通しや意識がもてるよう、製作した作業品の数量を目に見える形で確認できるように配慮した。

2. 現在の対応の仕方（就労先）

① 強い語調に対して

→その場で注意し、目に見える形で約束をしていく。

② 作業中の無駄話、独り言について

- ・コマーシャル、相撲やサッカー等のスポーツ実況を真似た独り言に関して

→その場で注意。または、仕事の影響のない範囲ならば無視して対処。ただし、休憩時間はOK。

No. 3

③ 作業内容について

- ・店頭で勝手に出てしまうこと。

→バックヤードの仕事に専念することを本人と約束して確認。

- ・他の事柄に注意が引っ張られてしまうこと。

→ある程度仕事の始めと終わりがわかるような言葉かけ「ここまでやったら終わり。」「次の仕事は、○○だよ。」や仕事の分量を示す。

- ・道具等の使用の仕方について

→その都度、一つずつ繰り返し教えていく。
（不器用な面も特性、しかし身につくことで確実になっていく。）

④ 時間へのこだわりについて

- ・作業時間

→「延長」、「変更」などと事前に伝える。

- ・勤務終了時間

→終了時間にこだわりがあるため、あらかじめ約束して延長しておく

No. 4

3. 特性

① パソコン（ワード・エクセル）は、得意である。数値や地名等の記憶力も抜群である。

② 漢字検定3級の資格を取得しており、「干瓢」等難しい野菜の読み書きが得意である。

③ 対人関係において、話が一方的になりやすい傾向がある。

ードの仕事に専念する」と加筆した（図Ⅳ-13）。以上の
ような新たな支援方法や手だてに沿って支援を行った。就
労先にアスペルガー障害（本人）の理解を深める難しさは
あったが、現在はH. Tを前向きに受け入れるスーパー側
の様子がみられるようになってきた。また、H. Tも改め
て自分の課題等を意識し、集中力を持続させながら働いて
いるという報告を受けた（写真Ⅳ-9）。

②の個別移行支援計画（卒業後支援用）（次ページ資料
Ⅳ-8-1、Ⅳ-8-2）による卒業後の関係機関との連
携については、事業主を始め、障害者職業センター、ハロ
ーワーク等と学校が連携しながら、H. Tを支援し
ていくために再度関係諸機関を訪問し、個別移行支
援計画を基に現在の就労の様子等を伝えた。また、
スーパーに訪問した時のH. Tの状況や情報等を保
護者に知らせ、保護者からも毎日の連絡帳を通して
知り得たことや、本人の話を、卒業後支援係の教師
や前担任に知らせるようになった。トラブルの際、
保護者と連絡が取りやすく、常に協力的であったた
め、共有した情報を基に共通理解をしながら支援が
できた。

③の居住地及び就労先地域の生活支援センターとの連携については、卒業時の生活支援の支
援機関は、保護者や地元の生活支援センター・交番・余暇サークル・発達障害者支援センター
等であったが、H. Tの就労先が居住地の機関の管轄外であり、これからの本人の生活支援
を考えた場合、就労先地域の生活支援センターのコーディネーターと連携を図ることも重要と
なる。

3) 考察と今後の課題

障害理解の観点から、アスペルガー障害という理解されにくい特性を、個別移行支援計画を
通して関係機関と情報交換することは、必要なサポートを受けるために重要である。また、文
書化された従来の個別移行支援計画の活用と同時に、サポートカードのような本人の特性・願
いをわかりやすく尚かつダイレクトに伝える書式を活用していくことは、有効な支援方法の一
つになると考える。今回の事例を通して、一般的な障害理解のリーフレットのみではわかりに
くい現状に直面したことで、リーフレットとともに就労先に合うサポートブックを作成するこ
とは、現場実習や就労支援において必要になると思われる。

関係機関との連携については、卒業後への移行支援システム（卒業後）を基に、必要に応じ
た相談・職場訪問を計画的にすすめてきた。その際に卒業後支援調査を実施し、就労の実態や
卒業後の生活状況を知ることにより、就労・生活両面の支援のニーズを把握した支援が関係機
関とともにできると考える。卒業後支援をしていく中で、保護者の協力があり、学校と家庭と
の連携がとれていたことは大きいものであった。また、今後はH. Tのような発達障害の理解
を深めるために関係諸機関との情報を共有していく連携体制を確立していきたいと考える。

- 約束**

 - ・ 仕事中新聞紙などを見ない
 - ・ 包丁の刃先を下に向ける
 - ・ 仕事中は私語をしない

休憩時間はOK

 - ・ **バックヤードの仕事に**

専念する

図Ⅳ-13 約束カード



写真Ⅳ-9 バックヤードで働くH. T

個別移行支援計画（卒業後支援用）

1 プロフィール		(顔写真)
氏名	H. T 性別 男 生年月日 昭和59年〇月〇日	
卒業年	平成18年3月 住所 〇〇〇市△△△△	
連絡先	(〇〇〇)－△△△△	
進路先	スーパー〇〇 出身校 宇都宮大学教育学部附属養護学校	
実態・特性	<ul style="list-style-type: none"> ・読み書き計算は、5・6年生以上の知識をもつ。地理や特定のテレビ番組、サッカーや相撲等の情報に詳しい。また、パソコン（エクセル・インターネット）等の情報機器を操作することができる。 ・電車やバス等の交通機関を利用できる。休日は一人で〇〇市内で買い物等をして過ごすことができる。 ・対人関係では、相手の気持ちを推察することは苦手であり、自分の好きなことを話し続ける等、周囲の状況を判断して行動することが苦手である。また、他者からの注意や指示が自分の意にそわないと過剰に反応し、文句を言うてしまうことがあり自己中心的な態度にみられやすいが、我慢できることが増えてきている。 ・約束や規則等は文字に書いて掲示することで意識できることが多い。 アスペルガー障害	手帳 療育(B2) 身障(級) なし
学校生活での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・与えられた仕事をしっかり行えるよう、ノルマの達成や仕事への取り組みを評価しながら仕事の楽しさややる気、仕事への責任感をもてるようにする。 ・指示をよく聞いて、集中して指示通りに作業に取り組むことができる。 ・周囲の人に対して不快感を与えないよう、社会生活を送る上で必要なマナーやスキルを身につけ、相手の立場を考えて自分の行動を選択することができる。 	
2 今後必要な就労支援・生活支援		
就労支援	これまでの状況	<ul style="list-style-type: none"> ・実習を通して仕事に対する意欲や達成感をもてるようになってきた。 ・スーパーに就労したいという思いから自分の苦手なことも我慢して、指示をよく聞いてきちんと取り組むことができるようになってきた。
	今後の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコン等の技能を活かせるような業務も経験を積み重ねることができる。 ・来店客に対し適切に対応できるようスキルを向上していく。 ・障害者職業センターとも連携をとりながら必要に応じてジョブコーチの利用を考える。
	支援機関(担当者)	<ul style="list-style-type: none"> ・事業主 ・ハローワーク〇〇(〇〇) ・〇〇障害者職業センター(〇〇) ・保護者
生活支援	これまでの状況	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭では、炊事、洗濯、買い物等の家事を自分で行うことができる。 ・休日はサークルで過ごしたり、一人で〇〇市内に出かけて買い物や施設の利用をして適切に過ごしたりすることができる。 ・通学途中に心ない少年にからかわれることがあり、地元交番等と連絡を取りあった。
	今後の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・給料の使い道などを通し金銭管理への意識を高めていく。 ・余暇を通して友達や人との関係を充実させていく。
	支援機関(担当者)	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者 ・〇〇地区生活支援センター(〇〇) ・〇〇交番 ・余暇サークル ・発達障害者支援センター
3 卒業後の学校からの支援		
今後のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業後3年間をめどに定期的に巡回を行う。 	
具体的な支援内容	<ul style="list-style-type: none"> ・同窓会や運動会などの機会に、本人の様子や保護者の話を聞く。 ・定期的に保護者や本人、進路先への聞き取りを行う。 	
支援機関(担当者)	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業後支援・同窓会係 	
備考		

関係機関との連携に御理解、御協力いただけますか。

(はい) むずかしい)

この個別移行支援計画を各支援機関に提出することに同意します。

平成18年 3月10日

本人署名 〇 〇 〇 〇 (印)

保護者氏名 〇 〇 〇 〇 (印)

卒業後支援調査

卒業生氏名 (H. T)
進路先 (スーパー○○)

卒業年度 (17年度)
担当者 (○○ ○○)
同行者 (○○ ○○)

1 訪問日 ○ 年 ○ 月 ○ 日

2 勤務状況 ☒ 皆勤 時々休む 休みが多い
欠勤の理由 ()

3 健康状態 ☒ 良好 普通 不良
不良の理由 ()
通院 (月に 回) 服薬 (☒ 朝 ・ 昼 ・ 晩)

4 仕事の内容
(バックヤード青果部門:野菜の袋詰め・ラップかけ・定価ラベル貼り等)

5 報酬 ☒ 月給 時給 分からない
月給の場合: 1か月 (○○, ○○○円)
時給の場合: 1時間 (円)

6 人間関係 良好 普通 ☒ 良くない
「良くない」と思われる場合の理由
(仕事場の中では、年齢も一番下でありながら目上の人に対する言葉遣いが悪い。)

7 職場環境 良い ☒ 普通 良くない

8 問題点・疑問点

- ・ 工作中的の会話の仕方や独り言、自分の興味・関心の強いことなどを一方的に話し続けてしまうことが目立つ。
- ・ 実習中から課題であった野菜を包んである新聞紙の記事が気に入らない読んでしまうと、仕事の手が止まってしまうことがある。

9 職場担当者の意見

- ・ 就職してから、新聞紙を読んでしまうことがあり、仕事に集中しないことがある。
- ・ 注意を受けて、仕事が思うようにできないとそのことに対する暴言がある。
- ・ 約束したことが守れず勝手にバックヤードを離れてしまうこともある。
- ・ 感情の変化に対して危険を感じることもある。

10 その他 (余暇活動・異性交遊・家庭生活など)

- ・ 給料から携帯電話の料金を支払っている。
- ・ 休日は、余暇サークルに参加したり、買い物に出かけたりしている。
- ・ 学校に来て近況報告をすることも多い。

7 まとめと今後の課題

17年度、18年度の2か年継続で「個別移行支援計画を基にした就労支援の実際」というテーマで、事例を通して、卒業後への移行支援システムの検証や個別移行支援計画の活用と見直し、また、移行支援の在り方について検討してきた。

移行支援システムに関しては、基本的なシステムは現状のもので機能することが検証できた。今後は、個々の実情に沿った対応の仕方を蓄積して、いろいろなケースに対応できるようになるであろう。

個別移行支援計画（在校生用）については2年間利用してきて項目や書式も現行のもので活用することができた。あまり内容が豊富すぎて、利用する側が使いにくくなっては意味がない。今後は、実際に記入される内容について実習先や進路先に必要な情報を精選して書き込んでいくことと、サポートカードやサポートブック等を有効に利用することで、必要な情報が伝わるものとする。

O. Mの事例からもわかるように、アセスメントや現場実習での評価、授業での成果等を、個別移行支援計画に反映させるサイクル（78ページ図Ⅳ－5）にのせて運用していくことが、個別移行支援計画の有効的な活用といえるだろう。さらに個別移行支援計画などの情報から、個々の生徒にあった職場開拓を積極的に行い、障害者理解を促進するためのツールとして、活発に利用していくよう努力していきたい。そして生徒の「やりたい仕事」と「できる仕事」の一致に向けて支援していきたい。

卒業後支援の部分では、H. Tの事例のように、発達障害がある生徒の場合、就労支援の難しさを感じたことも事実である。事前にその事業所で実習を積み重ねてきたにもかかわらず、一度改善することができなくなったり、新たな課題が起こったりということは今後も予想されることである。また、卒業時における個別移行支援計画（卒業後支援用）やサポートカードを利用した引継ぎのみでは伝わらない部分があったことや、職場の環境の変化が本人に大きな影響を与えていたことなども反省材料となった。今後も就労先の情報をきちんと収集していきたい。また、このような就労支援の難しさを、福祉や行政との有機的なサポート体制で乗り越えていきたいと考える。

関係諸機関との連携という部分では、個別移行支援計画が、実習先や進路先、生徒とかかわる諸機関と情報を共有する上で、本人にあった支援を考えていくための重要なツールとなってきた。今後も個別移行支援計画を基に、就労・生活両面の包括的な支援ができるよう関係機関との結びつきを深めていきたい。

今年度、障害者自立支援法が施行されたこともあり、福祉的就労の場面では新たな課題が想定される。そこで今後は、障害者自立支援法の動向に合わせて、障害者自立支援法と個別移行支援計画がリンクできるのか、新しい制度に対応した移行支援について検討していくことが必要である。